

山口 拓実 北陸先端科学技術大学院大学 マテリアルサイエンス研究科 准教授
(前 生命・錯体分子科学研究領域 助教)



分子研の包容力

やまぐち・たくみ / 2008年東京大学大学院工学系研究科応用化学専攻博士課程 修了、同年5月より分子科学研究所/岡崎統合バイオサイエンスセンター 助教、2015年10月より現職。
寒さが苦手なので、初めての北陸の冬を心配しながら過ごす今日このごろです。

分子研での私の日々は、何よりその包容力に支えられてのものでした。ご存知の方もおられるかと思いますが、分子研への着任にあたり、私は研究分野を大きく変える決断をしています。新しい環境というのは、期待と不安に満ちたものであることは常ですが、当時は周囲を飛び交う用語がまるで魔法の言葉に聞こえるような有様でしたから、緊張も強く、悩むことも多くありました。そんな私にとって、分子研の多面性 <バイオ関連の先端的な環境に囲まれながらも、ふとしたおりにバックグラウンドである錯体化学に触れ合うことができる> には、多様な存在を受入れ、時に厳しくも励ます包容力を感じました。分子研が誇る920MHz

NMR装置を震えながら触った日々や、施設見学者を前に大見得を切ったことは、今ではよい思い出です。

また、所内の異分野交流はもちろん、統合バイオの活動を通じて得た生理研や基生研との交流、さらには天文台、核融合研の知り合いもでき、これらは大きな財産となりました。分子科学に深く向き合うとともに、幅広く自然科学への門戸を開く。現在の分子研の大きな魅力ではないかと思っています。

分子研での思い出と言えば、国際交流についても欠かせません。アジアコア事業やJENESYSプログラム (JSPS 事業「若手研究者交流支援事業～東アジア首脳会議参加国からの招へい～」) など、様々なプロジェクトで大変お世

話になりました。多国籍な研究員や総研大生に囲まれ、多くの友人に恵まれました。

新任地である北陸先端大は、総研大と同様の大学院大学であり、学生集めが重要課題となっています。国内はもちろん、先だつては中国へ、年明けにはインドへ、大学間連携の行事で訪問します。国際交流はますます広がっていきそうです。

加藤晃一教授はじめ、本当に多くの方に支えられ、感謝は述べきれません。今後とも、どうぞよろしくお願い致します。

覧古考新02 | 1971年

化学の進歩に基いて、今日ではおよそ二百万種にのぼる分子が知られるに至りました。それらの分子は、われわれが日常経験する物質のみでなく、広く生物体の組織をも含んだ諸物質の機能を担う根源とみなされるものであります。すなわち分子は、物質の単なる「成り立ち」を意味するものとしてではなく、その「働きの生ずる機構」として認識されるに至りました。それ故、直接個々の分子に肉迫して分子のもつ機能を探求し、その可能性を開発することを目的とする「分子科学」が重視されるに至ったのは当然のことです。

分子科学はその言葉自身が新しいように、実は物理学と化学を土台として発展した比較的新しい科学の分野であります。しかし、物質科学の将来を予見するならば、そのなかで占める分子科学の役割は極めて大きいものとなるでありましょう。それのみでなく生物科学の将来に対して、分子科学の方法は大きな貢献をすることでありましょう。それ故われわれは、分子科学の発展をはかり研究者の育成につとめることを重大な責務と考えております。

特定研究分子科学研究班『分子科学によせて』1971年
赤松秀雄 (日本学術会議化学研究連絡委員会所属 分子科学研究所小委員会)